

# *risei + trip*

vol.  
22



特集

目指せ、日本代表！  
英語が人生を変える。

# 目指せ、日本代表！

「日本の鍼灸を世界に広めたい」「日本代表チームのトレーナーになりたい」

そんな夢を抱く人を支える学びが、本校にはある。

自分の専門領域と英語を掛け合わせると、人生にどんな扉が開くのか。

英語というパワーボードに手を伸ばし、海を渡つた先輩たちの姿を追う。



1 鈴木さんの治療院「Japanese Treatment Centre」にはアーユルヴェーダの医師も常駐し、毎日予約が埋まっている。2 「日本の鍼灸は世界で認められているのに、世界で働く鍼灸師は少ない」と話す鈴木さん 3 現地でベッドを自ら調達し、選手にテーピングをする巴山さん



photographs by Frankie Abekawa

## もう、英語から逃げたくない。

鈴木さんが「今の学生がうらやましい」と話す現在の履正社専門の外国語学科で、英語を学んでいるのが巴山海珠さんだ。

彼は大学卒業後、理学療法士としてスポーツ整形外科で勤務しながらプロバスケットボールチームのメイカールスタッフとして活動していた。チームには外国人選手がいたのだが、ケアを提供したいのにできない。技術がないわけではない。声がかけられないのだ。英語が話せたら、日本代表チームのトレーナーになるという夢にも近づけるのに」悔しさが彼の心に火をつける。仕事を辞めて履正社専門に入学した。

必死にインプットし、積極的にアウトプットする日々が始まった。そして、1年次の終わりには、オーストラリアに6週間の留学に行くことを決意。語学学校に通うだけではない。外国語学科・佐藤秀典GMが、熱意ある彼のために、現地のプロバスケットボールチームでのインターンを用意した。

「英語を話すスピードが早いのと、オーストラリア独特のアクセントが聞き取りづらくて、留学当初は正直きつかったです。だけど2週間を過ぎたあたりで、ふと気づいたんです。『口から出る言葉も、頭の中で考えているときの言葉も英語になってる』って」

スポーツ現場で使う英語には、短さ、早さ、的確さが求められるが、授業で何度も声に出したフレーズが自然と口から出てくるようになっていた。その瞬間、自分の成長を感じたという。

「英語×医療」「英語×スポーツ」「英語×トレーナー」など、英語に「やりたいこと」が掛け合ったとき、人の心には火がつく。鈴木さん・巴山さんの経験が、それを教えてくれた。

■

異国の中で暮らし始めてから7年経った現在は、「英語で話すほうがラク」と言えるほどだが、移住当時の英語力は、「日常会話レベル以下」だった。そんな鈴木さんに英語上達の秘訣を尋ねてみた。

「何のために英語を話したいのか明確にすること。そして、『英語だけ』の環境に身を置くことです」

鈴木さんが在学中にはなかつたが、現在の履正社専門には、スポーツやトレーナー、医療に特化した英語が学べる外国語学科がある。ほとんどの授業はネイティブの教員によるオールイングリッシュだ。

「国内外で外国人と働きたいなら、英語はできて当たり前。ハーバードは高いかもしれないが、チャレンジする価値はあります。日本人特有のきめ細やかな技術には、世界から絶大な信頼が寄せられているからです」

鈴木さんは、今後も日本の鍼灸を広める活動を多角的に進めていきたいと語る。夢は日本を飛び出し、海を越える。どこまでも高く、遠くへ広がるばかりだ。

## 世界で信頼される、「ジャパンブランド」。

アフリカ最小の島国・セーシェル共和国。この国で2020年、26歳で治療院を開業した卒業生がいる。野球コースと鍼灸学科を卒業した鈴木淳志さんだ。他の学生より少し英語が話せるという理由で、野球コースのオーストラリア遠征の際に通訳を任せられたことがあった。意外なほど自身の英語が通じたことに喜びを感じ、帰国後は、オンライン英会話を毎晩90分受講し、週2回は英会話スクールに通う生活が始まつた。

一方で、「医療現場で働きたい」という以前からの思いもあり、鍼灸学科卒業後は鍼灸師として病院に勤務することに。恵まれた環境で働き始めた。だけど、何かが物足りない。「やっぱり海外で働きたい!」という思いが燃えてきた。持ち前の行動力で早速、セーシェル共和国の治療院での求人を見つけた。